

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

デンマークにおける「障害のない社会」構想とノーマライゼーション：  
余暇活動としてのフォルケホイスコーレの展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00000957">https://doi.org/10.15021/00000957</a>

## 第4章 デンマークにおける「障害のない社会」構想と ノーマライゼーション

——余暇活動としてのフォルケホイスコーレの展開——

鈴木 七美

国立民族学博物館  
総合研究大学院大学

### A Study on the Practices of Normalization Searching for a Society without Environmental Handicaps: Focusing on the Evolution of a *Folkhøjskole* (Folk High School) Conducted as Danish Leisure Activities

Nanami Suzuki

National Museum of Ethnology  
The Graduate University for Advanced Studies

デンマークの特徴的な余暇活動として、子どもから高齢者まですべての世代の人々を対象として、日常の活動以外のオルタナティブな学びや遊びが実践されてきた。余暇活動は、神学者・歴史家の N. F. S. グルトヴィに率いられた19世紀の民衆運動と農民教育を源流とし、現在は、人生において立ち止まりや学び直しの機会を提供すると同時に、人々を地域に結びつける役割も期待されている。

余暇活動の実践にユニークな役割を果たしてきた「人生の学校」、フォルケホイスコーレ（国民大学）は、それぞれが設立者の学びの場に関する構想をもとに運営されており、学ぶことの意味や学びの場のありように関する考え方を提示するものとなっている。本稿では、知的障害者とともに暮らして学ぶ場として構想されたフォルケホイスコーレの設立の経緯と実践の展開、およびこのフォルケホイスコーレと連携している機関の活動に関して、現地調査にもとづき検討する。これらをとおして、すべての人の活動に配慮した「ノーマライゼーション」の実践を重ねて得られる「障害のない社会」構想における余暇活動の意味あいについて考察を深める。

One of Denmark's distinctive leisure activities has been the practice of alternative learning and play apart from normal everyday activities, targeting people of every age, from children to senior citizens. Such leisure activities sprang from the 19th-century people's movement and agricultural education spearheaded by the theologian and historian Nikolaj Frederik Severin Grundtvig (1783-1872). Today, they offer people the opportunity to step back and take stock of their lives, as well as the chance to brush up their skills and knowledge. At the same time, they play a role linking people with their own communities.

Danish *folkhøjskole* (folk high schools) have played a unique role in the practice of leisure activities in Denmark as “schools of life.” They are each operated according to the vision of their respective founders, and each embodies a different idea about the meaning of learning and the way that learning venues ought to be organized. Based on field sur-

veys, this paper focuses on one *folkhøjskole* that was envisioned as a place of learning for people living together with those who are intellectually challenged. The paper explores the background of the school's establishment, its operation in practice, as well as the activities of the other organizations that act in coordination with it. The attempt is to deepen the consideration of the meaning of learning as it takes place at this school as a practice of normalization searching for a society without environmental handicaps.

- |                              |  |
|------------------------------|--|
| 1 はじめに                       | 3.1 「ノーマライゼーション」理念にもとづく「障害のない社会」とフォルケホイスコーレの創立 |
| 2 デンマークのフォルケホイスコーレと「余暇活動」    | 3.2 フォルケホイスコーレの生活                              |
| 2.1 「もう一つの時空間」としての余暇活動       | 4 フォルケホイスコーレと連携する機関の活動                         |
| 2.2 立ち止まりと学びの場としてのフォルケホイスコーレ | 4.1 知的障害者通所施設                                  |
| 3 知的障害者と暮らして学ぶフォルケホイスコーレの展開  | 4.2 生活指導教員養成大学の役割                              |
|                              | 5 おわりに   |

\* key words: society without environmental handicaps, leisure activities, Denmark, Folkehøjskole, intellectually handicapped

\* キーワード：障害のない社会，余暇活動，デンマーク，フォルケホイスコーレ，知的障害者

## 1 はじめに

デンマークの余暇活動は、すべての世代の人々が重層的な時間を過ごすことが可能となる「もう一つの時空間」として展開されてきた。この活動は、神学者・歴史家のN・F・S・グルントヴィ（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig 1783-1872）に率いられた19世紀の民衆運動と農民教育を源流としている。余暇活動は、第一に人生において立ち止まりや学び直しの機会を人々に提供し、第二に人々が暮らしの場を創ってゆくことに参加する一つの道を開くことに活用されてきた。

余暇活動のなかでも、「人生の学校」とも呼ばれるフォルケホイスコーレ（国民大学 Folkehøjskole）<sup>1)</sup>は150年以上の歴史をもっており、デンマークにおいて特徴的な学びの場としてユニークな役割を果たしてきた。フォルケホイスコーレは、それぞれが設立者の学びの場に関する構想をもとに運営されており、暮らしの場や社会のありように関するメッセージを投げかけるものでもある。

本章では、知的障害者とともに暮らして学ぶ場として構想された1つのフォルケホイスコーレの設立の経緯と実践の展開、およびこのフォルケホイスコーレと連携している機関の活動に関して、現地調査にもとづき検討する。これらをとおして、このフォルケ

ホイスコーレから発信される「ノーマライゼーション」理念にもとづいた「障害のない社会」に向けた考え方と実践に関し、考察を深める。

資料として、フォルケホイスコーレ (Nordfyns Folkehøjskol, Bogense 2005年8月, 2006年11月～12月)における現地調査, スタッフへのインタビュー (2009年2月～3月), 連携機関である知的障害者施設 (Otterupgården, Otterup), 生活指導教員養成大学 (フュン生活指導教員養成大学 Odense 2006年11月～12月, HOVEDSTADENS PÆDAGOGSEMINARIUM, Vanløse 2006年9月), アイビュー自治体・高齢者センター<sup>2)</sup> (アイエボー・プライアセンター Egebo Plejecenter)・高齢者委員会 (Bogense 2006年11月～12月)における現地調査, スウェーデンにおけるフォークホイスコーラ (Lilieholmen Folkhogskola, Rimforsa 2010年3月), および継続的に行ったインタビュー調査を含む資料収集によって得られたデータを用いる。

## 2 デンマークのフォルケホイスコーレと「余暇活動」

### 2.1 「もう1つの時空間」としての余暇活動

デンマークにおけるフォルケホイスコーレは、世代別に構想されているほかの学びの空間とともに、「余暇活動」を構成している (鈴木 2007: 75-76)。

デンマークの余暇活動は、およそすべての人、すなわち子どもから高齢者までを対象に構想されている。その第一の目的は、人々が学校や職場で多くの時間を過ごすことによって活動領域が狭まり、居住している地域における活動を十分にできず周囲との交流が制限されることのないように、すべての世代の人が活動する「もう1つの時空間」を設定することである。人々の日常生活のありようは世代によって特徴づけられる傾向がみられるが、人間の全体性という視点から、どの世代の人にも多様な活動の可能性を拓く努力がなされている。

子どもたちの余暇活動として、学童、少年クラブなどが実践されてきた。また失業者にも学ぶ機会を与え、成人も学び直しの余裕をもつことができる。成人の学習活動への参加は年間150万人とされ (1996年) (Danish Ministry of Education 2006), 青少年の2/3が1つ以上の組織活動に参加しているといわれている (総務庁青少年対策本部 1993; 湯沢編著 2001: 178)。青少年が居住地域における余暇活動を十全に行うことができるように、学校での部活動は行われず、学習塾もみられない。

一方、高齢化が進行する状況で、高齢者の活動の場を広げてゆくことも検討されてきた。1990年には「余暇活動支援に関する法」によって「イヴニング・スクール」がすべての自治体で制度化され、1996年には4億260万 Kr (約60億3,900万円) が投入された (湯沢編著 2001: 181)。これは、人々が、就業する時間以外に楽しむことや学び直しのために設定された公的助成である。

余暇活動の第二の目的は、「資源としての人間」の能力を引き出し、地域社会の構成に生かしていくことである。1950年代以降、女性の就業率が高まり、とりわけ都市において高齢者が孤立せず、子どもたちにも十分に目の届くような地域社会のありかたが模索されるようになった。1960年代後半以降、行政単位の再編に伴い地域の解体が進むなかで、1973年にはデンマークがEC（ヨーロッパ共同体）に加盟し、国民観念の醸成よりもむしろ地域社会の形成が課題として浮上した。

それは、必要とする時に十分なケアを受けられるという安心感を、すべての人が平等にもつことができるようにするという考え方にもとづく。平等なケアを遂行するにあたって、デンマークではケアの単位を家族と考えずに個人を対象としてきた。デンマークでは、もともと親子三世代が同居することはまれで、99%が別居といわれる。子どもは18歳を過ぎると独立して自分の住居を構える。だからといって親と子が疎遠というわけではなく、週に1回以上会う人の割合が40%で面会頻度という点では日本より4割以上も多い（湯沢編著 2001: 205-207）。このように、もともと核家族で居住する傾向のあるデンマークにおいては、家族のメンバーだけで支え合うのではなく、地域を基盤として助け合うシステムを組織することによって、誰もが一生をつうじて安心して暮らせる社会の構想が必要と認識され、すべての世代の人の自発性と共同性の強化が志向されてきた。労働時間を週に37時間に設定し、すべての人がその人の能力をもって社会に繋がることによって構成員を支えるという構想が練られてきたのである。

そうした背景から明確に認識されるようになった余暇活動の社会政策的役割として、青少年に関しては、通常の学校以外に地域に根ざした活動を行う場を設定することにより、青少年の非行・犯罪防止対策という面がみられる。失業者に対しては、1990年代「積極的労働市場政策」として、失業手当の受給条件として学習活動への参加が求められるようになった。「非寄宿制学校」を拠点として地域の失業者を把握し、かれらが労働市場、教育システムに参加できる状態を保持することが目的である。

1980年代以降、施設利用から在宅への移行を含め大きく転換した高齢者福祉対策においても、高齢者をケアの対象として捉えるのではなく、「自己資源（残存能力）」を活用することが謳われた。「デイセンター」は、自宅で生活する高齢者が、自立できるよう健康を維持し、地域の人々と交流する活動を行う場として重視され整備されてきた。

17.5歳以上の誰もが寄宿し学ぶことができるフォルケホイスコーレは、余暇活動の第一の目的に即して人々が自らの生活を再構成する時空間を保障し、第二の目的に沿って、人々が社会のありようを再考する協働作業に参加する場を具体的に用意しているといえよう。現代デンマークのフォルケホイスコーレは、個人を構成員と捉える社会に適合するミーティング・ポイントを確実に提供する余暇活動の1つと位置づけられるが、同時に、デンマークの余暇活動の理念を保持し次世代に伝える場としての機能も期待されている。

## 2.2 立ち止まりと学び直しの中としてのフォルケホイスコーレ

余暇活動の思想あるいは自己教育についての考え方は、デンマークの歴史のなかで生まれてきたデンマークに特徴的なものである。19世紀半ばのデンマークは、近代化のもとで都市化が進行し、農村と都市の格差拡大、農村の疲弊が進行していた。デンマークの哲学者、詩人、教育者、聖職者であったN. F. S. グルントヴィは、この状況を打破する方策の1つとして、農村の活性化を構想した。そのためには、農村に住む人々が、自分の土地で仕事をしながら集い学ぶ機会をつくっていかねばならないと、グルントヴィは考えた。かれは、地方の若者たちが学びの場を確保することによって、自分たちの住む社会や環境について考える力を育てることを提唱したのである。グルントヴィの成人教育あるいは生涯教育の構想は、仕事をもつ人々が学び続ける活動をするという意味で、デンマークの社会を現在も横断する特徴的な「余暇活動」の起源として位置づけられる。

グルントヴィの考え方は、同時代ヨーロッパのフォルケ（国民、民族）のオプリュスニング（教育、啓蒙、成人教育）、すなわち「民衆啓蒙」という意味をもつ「フォルケオプリュスニン」の提唱とも呼応していた。定型教育に属さない教育や学習方法の重要性を謳う「フォルケオプリュスニン」は、19世紀の宗教的・社会的運動に起源をもつ。1830年代ヨーロッパ中部の革命運動の波を受け、知識人、中産階級のあいだでは自由主義運動が興隆し、封建的階級差別是正や下層農民の生活改善が主張されていた。シュレスヴィヒ公国領をめぐるドイツとの戦争を経験した19世紀のデンマークでは国民意識、愛国心が自覚され表現されるようになり、青年たちの社会的関心に答える機会が重視された（コースゴー 1999: 142-161；タニング 1987: 233-253）。グルントヴィの提唱は、こうした時代の傾向と連動していたのである。

すべての人が学ぶ機会をもつことの意味として、グルントヴィは、人間の生の不可思議さや尊厳を知ることをあげていた。その方法としてグルントヴィが重視していたのは、「対話」である。人々が対話を重ねることによって、すでに民衆自身に内在する考え方や資質に光をあて力を合わせて生きることがグルントヴィの願いであった（コック 2004: 138）。

グルントヴィの構想を実践の場に生かすかたちで整えたのは、C. コル（Christen Kold 1816-1870）である。グルントヴィの思想は、コルによって国民大学として具体化され、農村青年たちの学びの場が整備されていった（湯沢編著 2001: 179）。

フォルケホイスコーレは、現在もオルタナティブな学びの空間の1つとして存続し「余暇活動」の一翼を担っており、デンマーク国内に約100校、ノルウェー、スウェーデンなど北欧全体で約400校程度設立されている<sup>3)</sup>。この学校は、国家の方針から自由で干渉を受けず、設立者の考え方にもとづき展開することができる。その意味で、フォルケホイスコーレの実践は、設立者の信念や構想を常に具体的な形で社会に提示するという側面

がある。さまざまな理念を掲げたフォルケホイスコーレの存在は、デンマークや国内外から集まる人々が何を求めているのかを映し出している。

フォルケホイスコーレは、単位を取得し卒業するという学校ではない。いわゆる資格に結びつくわけではない。基礎知識を習得する専門学校とは異なり、入学・修了試験や成績表もない。この学校は全寮制で、教師や仲間との会話や生活が重視されている。校長と少なくとも教員の1人は、寄宿制である学校の敷地内に学生とともに暮らすことが条件となっている。

学校は、17.5歳以上の誰にでも開かれているので、人は人生のどの時期にでも、自分の日常生活からいったん離れて寄宿舎に住み込み、自分が希望する内容を学んで考え、新たなことがらや人々に出会う機会をもつことが可能である。大学入学前や会社をいったん辞めたり休職してやってくる者もみられる。大学入学前に、旅行したりフォルケホイスコーレに入学することは、経験の1つとして評価されるといわれる。休職者が次の仕事に就くまで滞在する場所としても活用されている。フォルケホイスコーレは、一生の中で、仕事や家庭生活にとどまらず、立ち止まり自らの位置を確認したり将来を考えたりすることができる、「もう1つの時空間」を提供している。

学校ごとに科目は様々に設定できるが、一般に3ヶ月や6ヶ月など数ヶ月が1タームを構成している。経費の約8割は行政からの援助でまかなわれていることは、デンマーク社会において、さまざまな学びのありようの必要性が認識されていることを示している。特徴あるカリキュラムを掲げた学校で共通に扱われているのは、グルントヴィイの思想やデンマーク文化、音楽などである。

以下では、フォルケホイスコーレの特徴として、知的障害者を含むすべての人を受け入れる方針を提示している Nordfyns Folkehøjskole に焦点をあて、設立の経緯、実践展開を辿る。またこの学校の活動と連携する知的障害者施設、および、余暇活動の実践を支える人々を養成する生活指導教員養成大学についても、現地調査結果にもとづき検討する。

### 3 知的障害者と暮らし学ぶフォルケホイスコーレの展開

#### 3.1 「ノーマライゼーション」理念にもとづく「障害のない社会」とフォルケホイスコーレの創立

Nordfyns Folkehøjskole (日欧文化学院) は、デンマーク第三の面積をもつフュン島北部の海にほど近いボーゲンセ市郊外のハリスレウという集落につくられている。

福祉社会の実態に興味を抱いた創立者の千葉氏は、1967年に26歳で北欧に旅立った。フィンランド、スウェーデンを経てデンマークに辿り着き、自分の構想にもとづくフォルケホイスコーレ設立の夢をもつにいたった(千葉 2009a: 198-203)。千葉の目的の1つ

は、デンマークにおける「平等」の理念をフォルケホイスコーレの運営において実践することであった。千葉によれば、デンマークにおける「平等」の考え方は、公的財源を誰にでも平等に分けるのではなく、必要な人々にはより手厚く提供することであった。これはデンマークにおける「ノーマライゼーション」の考え方を実践しようとしたものである。

具体的な構想として、第一に、知的障害者にフォルケホイスコーレで学ぶ機会を創ること、それだけでなく、第二に、健常者・知的障害をもつ人々がともに学ぶ施設をつくることが掲げられた。それは、「障害のない社会」について考え実践する場所をつくることをも意味していた。

デンマークにおいて、障害は第一に、人の一生に起こりうる状態、すなわちすべての人にかかわることがらとして把握されている。したがって、障害のある人々の「ウェルビーイング」に配慮して環境を整える「ノーマライゼーション」は、すべての人にとって「障害のない」社会を構成するために不可欠の重要な実践と位置づけられる。

障害者福祉の基本的理念として知られている「ノーマライゼーション」は、デンマークのバンク・ミケルセン（Bank-Mikkelsen, Niels E. 1919-1990）によって最初に提唱された考え方である。「ノーマライゼーション」は、障害のある人々が、健常者と同様に希望する活動を行うことができるように、環境を整えるという考え方である。バンク・ミケルセンは、ノーマライゼーションの基盤となる考え方として、すべての人が平等であることをあげ、障害のあるなしにかかわらず、人々が差別をうけることなく、ノーマルな生活条件を得る権利をもつことを主張していた。

バンク・ミケルセンによって提示されたすべての人の権利としてのノーマルな生活条件は、一般市民が文化的、宗教的、社会的枠組みのなかで暮らしている生活条件、あるいはその枠組みのなかで目標とされている生活条件であり、たとえば、隔離されることなく自由な市民である権利、社会生活に参加する権利などから構成されている（野村2010: 216）。この生活条件は、地域住民によって常に議論され、その実現の手法が継続的に検討されることが不可欠のテーマである。人が一生のあいだに心身にさまざまな変動や障害を経験することを考えると、「ノーマライゼーション」の提唱は、すべての人の活動の可能性を広げることに関し、継続的に議論することへの共通理解を促すことと位置づけられる。

「ノーマライゼーション」の考え方と深く関連しているのが、デンマークにおける「障害」に関する第二の把握、すなわち、「ノーマライゼーション」の実践が十分とはいえない社会を意味する、「環境に基礎をおく」障害概念（environmental-based concept of disability）と呼ばれるものである。この障害概念によれば、障害（disability）に障壁（barrier）が付加されると、disabilityは社会的・環境要因的に発生するhandicapとなり、補充・保障（compensation）が適切に付加されることによって機会均等が達成されると



される。handicap という語は、環境の障害を意味しているというのである (The Danish Disability Council 2006: 12; 野村 2010: 93)。環境に基礎をおく障害概念は、すべての人にかかわる「ノーマライゼーション」の実践を行うことこそが、社会の重要な課題であることを明示している。このことは、一部の専門職者が担うのではなく、さまざまな状況にあるすべての人が協働して行うべきことなのである。

フォルケホイスコーレでは、17.5歳以上のすべての人々が滞在し学ぶことができるが、その場を健常者・知的障害をもつ人々がともに暮らす場とすることにより、生活のなかで人々が「障害のない社会」を考える学び舎が構想されたのである。

千葉は、まずフォルケホイスコーレを設立するために、環境を整え許可を求めたが、実現するにはデンマーク中で最も長い年月を要した (千葉 2011)。第一に場所を確保しなければならない。千葉は、1914年に建てられた旧ハリスレウ村の古くなった小学校を買い取り、これを改築し校舎として利用してきた。さらにミーティングルーム、クラスルーム、住空間など必要な施設を整備していった。本館には、教室、食堂、厨房、事務室、リビング、テレビ室、学生用居室、共同のトイレ、シャワーなどが設けられている。その他、ゲストハウス、体育室、音楽室、ホビールーム、運動場、そして校長と教員の住居が設けられている (図1) (写真1・2・3・4・5)。さらに、2005年からは知的障害をもつ人々とともに学べる場を本格的に整備した。新館の学生寮も建設され、合計50人の宿泊が可能となった。教室、共同のトイレ、シャワー (車椅子用あり)、ミニキッチンなどの設備がある。障害のある者もすべて個室で生活している。

デンマークの暮らしと考え方を、日本の人々、とりわけ若者に向けて発信したいという願いをもつ千葉は、1997年よりデンマークおよび日本両国から学生を受け入れてきた。デンマークで数少ない日本からの学生を受け入れるこのフォルケホイスコーレでは、多



図1 Nordfyns Folkehojskoleの構成



写真1 Nordfyns Folkehøjskole



写真2 学生寮 (スワン寮)



写真3 学生寮（スワン寮）居室



写真4 学生寮（スワン寮）談話室



写真5 多目的教室 体育館

くの日本人が逗留し、それぞれの道を開いてきた。K氏もここを出発点として現在はベダゴウ（Pådagog）様々な施設において重層的な支援を可能とするための支援を行う自治体の職員）として活躍している。長年この学び舎と日本を往復し新聞特派員として世界各地で取材をしてきたZ氏は、2006年にこのフォルケホイスコーレの教員として敷地内に家族とともに住み始めた。2006年11月には、日本で介護士を務める人々やこれから日本に帰って社会福祉士を目指して再び大学で勉強を始めるT氏など、今までの生活を振り返り新しい道を模索する日本からの学生や滞在者が生活していた。

さらに近年、多くの国内外の人々を受け入れている。信教にもとづく食事習慣の違いによって、「皆でともに食事する」場に参加できない人々が寄宿を求めてくることもあるが、そうした「障壁」の一つ一つは、「障害のない社会」に向けた考え方と実践を多くの人々が考えることのできるテーマとして、フォルケホイスコーレでは共有されることになった。

### 3.2 フォルケホイスコーレの生活

フォルケホイスコーレは、デンマークの教育機関としては例外的な位置を占め、基本的には校長の理念にもとづいた私学である。デンマークにおける教育費は通常無料だが、寄宿を旨とするフォルケホイスコーレの場合は滞在費が必要である。千葉のフォルケホイスコーレの社会福祉コースの場合、滞在費は、12週間分でおおよそ12000KR（約24万円）



写真6 朝食後の集会

である（2006年）。資格を得ることとは関係なく過ごすこうした学校が存続するには、人々のニーズに適合的であることも必要である。

一日のスケジュールは朝食（午前7時30分）にはじまり、集会（8時30分）を経て（写真6）、午前中の授業（9時～11時45分）、昼食（12時）、午後の授業（13時30分～16時）、夕食（18時）である。夕食後も含め、これ以外に、さまざまな集いと季節の行事がある。

このフォルケホイスコーレでは、講義によってデンマーク文化、社会福祉の理論を学んだうえ、社会福祉施設、教育・医療機関を訪れて、参与観察を行い現場の人々と交流する経験を積み、さらに見聞きしたことや経験したことをもとに議論するという3つの活動が不可欠とされている。長期コースの場合には、現場で繰り返し実践する機会がふんだんに設けられており、資格をとることはないにしても、専門的な大学を受験する準備として位置づけることもできる。

必修科目は、①社会福祉（デンマークの福祉、教育、医療、コミュニケーション論、介護、介護テクニック、介護倫理を含めた職員養成教育、施設訪問研修）、②一般教養（デンマークの民主主義、歴史、日本との文化比較など）などである。選択科目として、創作的科目（陶芸、ジュエリー製作、銀細工、木工作）、体育（各種スポーツ、水泳、ヨガ）、語学（英語、デンマーク語）、その他（大道芸、ドラマ）などがある。選択科目は、社会福祉関連の仕事に就く場合の素養としても、活用が可能なものから構成されている。

どのクラスでも対話と実践が重んじられており、一方通行の講義形式を避け、ゼミナールかワークショップ（参加体験型学習）が適用されている。教職員はデンマーク人と日本人で、会話は普通高校と同様に主として英語である。学校で英語を共通語として用いることによって、より多彩な教員・学生をデンマーク国内に受け入れ、その資質を生かすことができるというのは、共通理解となっている。

最も重視されているのは、授業のみならず生活すること、そして対話することである。フォルケホイスコーレは全寮制で、寮生は多くの時間を共に過ごす。学生は、食事の準備や後片付け、職員とともにを行う食器洗い、居室と共同スペースの清掃を行うなど、日常生活におけるさまざまな役割を担う。日常生活における特徴として、寄宿し、配ぜんし一斉に食事して片づけるという生活をともにすること、毎朝毎晩、食事後のテーブルで、対話し議論する時間が設けられていること、そしてすべての活動においてやはり議論の時間が豊富に設定されていることがあげられる。3度の食事と3度のお茶の時間は、生活全般に関するさまざまな話を自由に語り合う時間として重要視されている（写真7・8）。国外からの学生もしばしば滞在するこの学校では、多様な文化の存在を対面の会話によって知ることが、他者に考慮しつつ自己実現する方途を考える、すなわち多文化共生の実践につながると考えられている。

一斉に食事をするというきまりは、デンマークの学校や施設においてはどちらかといえば珍しいことである。子どもたちは幼少から「自分で決めること」すなわち「自己決定」ができるようになることが重視されており、したがって、保育園<sup>4)</sup>でも、子どもたちはもってきたサンドイッチなどから構成されるランチを自分で決めた時間に食べ、昼寝などの休息をとることが推奨されている。高齢者センター（プライアセンター）でも、同様のことが観察された。自室で調理するための簡単なキッチンも設けられている一方で、食堂で食事を摂ることを選ぶこともできる人々は、三々五々食事に行く。時間を決めて全員が食事をとるといふ、管理者や介助者にとって効率的な方法は採用されていない。だが、フォルケホイスコーレでは、例外的に、長テーブルに座りともに食べ話すことが重視されているのである。

午後の夕食前の時間には、運動や散歩する余裕の時間がある。グラウンドはほとんどが芝で覆われており、学生たちは、土や草の香りのなかで太陽を浴びて過ごすことができる（写真9）。

夜にはさらに、さまざまな議論を含む活動が用意されている。デンマークにおける「ノーマライゼーション」や「自律」の考え方に関する講義、国外からやってきて滞在している人々の経験に関する研究発表（たとえば中国から来た人々による中国の地域文化や体験に関する発表）などが行われる。いずれも、発表の形をとるが、その目的はそれぞれの考え方を提示し議論を展開することである。

グループごとに進められる授業以外の日常生活空間は、知的障害・情緒障害の有無に



写真7 コーヒータイムの用意



写真8 夕食のメニュー ピュッフェ形式



写真9 夕方の時間

かかわらずすべての人に開かれている。夕食後のミーティングでK氏のギター伴奏で歌う習慣は、皆がともに歌えるレパトリーを増やしている（写真10）。

一日のうち何回かは、知的障害のある者たちの誰かがふいに押し黙ったり、あるいは大きな声を出したり号泣する場面に遭遇する。周囲の者たちがそうした行動の理由を理解できるとは限らない。スクールのスタッフたちは、「そういうことはよくあること」と説明していた。スクールでともに過ごす時間が経過すると、人々のさまざまな表現行動が問題としてではなく、日常の一コマとして共有されていく。また、寄宿している人それぞれに役割が課せられることにも配慮がなされている。たとえば、一時的滞在学习した日本からの学生の就業証明書授与式で証明書をひとりひとりに渡して握手するのは、より長期に滞在してきた知的障害のある学生たちの役割である（写真11）。誰もが光に照らされる場に立ち拍手を受ける機会が工夫されている。

「障害のない社会」の一環として構想され運営されているフォルケホイスコーレで、学生たち誰もが資質を開花させ豊かな時間を過ごすためには、教員をはじめとするスタッフたちが学生を観察しその活動を支えることが不可欠である。それらは、単独のフォルケホイスコーレのみではなく、スタッフを養成する教育機関や、知的障害のある人々がより多彩な活動をできるように設けられた知的障害者通所施設などとの連携によって担われている。次節では、こうした施設の活動に注目する。





写真10 夕食後の集会



写真11 Nordfyns Folkehojskole の修了式

## 4 フォルケホイスコーレと連携する機関の活動

### 4.1 知的障害者通所施設

フォルケホイスコーレと情報交換や学生の活動に関し連携している場として、Bent Lauresen氏が設立した知的障害者通所施設（Otterupgården Otterup）がある。ここは、知的障害者の通所施設・作業所である（写真12）。

デンマークでは18歳以上が成人とみなされるので、子どもは18歳から20歳くらいで親もとを離れ独立する。障害のある18歳以上の成人には、早期年金<sup>5)</sup>が支給され、住居や生活支援も保障されているので、人々は地域でグループホームやアパートなどで自立して生活している。障害があって一般就労が不可能な場合に通う作業所やデイセンター・デイホーム、ショートステイ、デイサービスなど障害者の保障は、家庭の収入にかかわらず国が無料で行う<sup>6)</sup>。すべての人を対象として、生活の場と日中の活動の場が設けられ重層的な活動が可能となることが重視されているからである（千葉 2009a: 166-168）。

こうした施設の具体的な構想に関わったのも、バンク-ミケルセンである（千葉 2009a: 155）。第二次世界大戦後、社会省の精神薄弱課で働いていたバンク-ミケルセンは、知的障害者が生活していた施設を訪問した。かれは、施設では食事が与えられ規則正しく生活することのみが目的とされ、生活者の生きがいや教育に関しては配慮がなされていないと感じ、大規模施設ではなく人間らしい生活を送ることができる場をつくることを提唱した。1954年に知的障害者親の会が発足し、1959年には生活支援法ともいべき法案が可決された。地方分権化が進められた1980年から1985年にかけて、障害者の生活に関しても細かな検討がなされ改善がみられた。

こうして整備されてきた施設の1つである知的障害者施設Otterupgårdenに通う人々が行う活動の1つとして、モノづくりがあげられる。木工、織物、染め物、油絵などの作



写真12 知的障害者施設 Otterupgården



写真13 知的障害者施設 Otterupgården における音楽室

品を創り、販売することもある。また、音楽の演奏を行うこともある（写真13）。これらいずれの活動も、知的障害者のみならず、他の施設やフォルケホイスコーレの人々と交流する契機となっている。千葉のフォルケホイスコーレにおける授業の一部は、この知的障害者施設で行われ、障害をもつ人々とともにモノづくりを推進することの意味、そしてその基底となるノーマライゼーションの思想と実践、自律、自由に関する考え方について議論がなされる。

## 4.2 生活指導教員養成大学の役割

フォルケホイスコーレの教員のなかにはデンマークの特徴の1つである、生活指導教員養成大学を経てきている者が多くみられる。デンマークの大学の数や種類は多くないが、そのなかで、生活指導教員養成大学は特徴ある教育機関であり、卒業生の需要も比較的高いといわれる。生活指導教員養成大学は、人々の多様なニーズに応えるための支援者を養成している。

さまざまな状況にある人々が同じ場所でともに学ぶことが重視されているデンマークでは、補助教員が活発に活動している。3年半で取得できるペダゴウという資格をとると、幼稚園、学童保育、小学校のサポート、精神病院、高齢者施設、養子縁組、家庭への訪問などにかかわる自治体の職員として働くことができる。デンマークの子どもたちの90%がなんらかの形で家庭外の施設を利用している（障害をもつ子どもたちを含む）。その90%の子どもたちを、教育・指導・サポートするのも、生活指導教員養成大学を卒業した人々だ。たとえば、小学校の教室で、理解が十分でない子ども、ほかの活動をしたい子どもなどに寄り添って活動するのが補助教員である。ペダゴウの活動は、社会と個人、社会と各家族が結びつきを深め、各家族や個人が孤立せず、問題があれば共有できるシステムを構築する一環でもある。たとえば、デンマークで比較的さかんな国際養

子縁組をしている家族の問題をすくい上げ、家族が交流する機会を設けたりする場でも、この人たちが活動している<sup>7)</sup>。

フン島で多くの卒業生を輩出してきたフン生活指導教員養成大学では約800人の学生が学んでいる。半年に1回入学の機会があり、一期におよそ110名が入学する。生活指導教員養成大学の入学資格の特徴として、就職した経験があることがあげられる。様々な経験をしていることが人間の全体性を豊かにするという考え方はデンマーク社会でしばしば言及され、大学の入学に際しても、高等学校卒業後に働いたことがあることや旅をしたことなどが評価される。だが、この生活指導教員養成大学ではさらに、働いた経験にもとづき、学ぶことによってどのようなことを自分に付加しようとするのか、目的を明確に表現することが強く求められている。

カリキュラムは、学校の教育方針によって異なる。フン生活指導教員養成大学の場合、入学後2ヶ月で2ヶ月間の現場実習がある。体験が重視され、適正がないと観察された場合、次の段階に進むことができない。専門科目として、生活社会学、社会学、心理学、保険、栄養学、指導学、選択科目として、音楽、ドラマ、自然学、技術、運動、デンマーク語、音楽、体育、演劇学などがある。

2006年に在学中であったM氏の場合には、幼稚園の補助教員をした後、より広範な活動をしたいという意志を固めて入学した。卒業生であるK氏の場合には、日本の高校を卒業した後、フォルケホイスコーレで過ごしながらか勉強して入学した。両親が日本で行っているグループホームの試みを幼い頃から見てきたK氏は、福祉のありかたに関心をもちデンマークの方法について実践にもとづき学びたいという希望をもっていたからである。卒業後、K氏は、学童、小学校の補習教室に勤務している<sup>8)</sup>。

デンマークで実践される「学び」の目標は、多様な人々がともに学び交流することによって、文化の多様性を経験すること、また、さまざまな状況にある人々がともに社会をつくることに参加する道を開くことに寄与することである。人々を包摂し、包摂する社会を不断に再生産する場合は、建物というよりも、時間と人間によってつくられている。こうした活動として、通常の公立学校以外に余暇活動の機会が設けられている。多彩な学びの場の実践に、生活指導教員養成大学で学んだ人々はなくてはならない役割を果たしているのである。

## 5 おわりに

本章では、デンマークの特徴的な学びと暮らしが統合された場としてのフォルケホイスコーレに注目した。フォルケホイスコーレは、第一に、すべての人が人生のどの時点においても立ち寄ることができるという意味で人間の全体性への視点から人々の人生を重層化させる機会を与え、第二に、フォルケホイスコーレで議論し考察したことを暮ら

しの場合や社会のありように還元する具体的な場を提供している。フォルケホイスコーレは、それぞれが設立者の構想をもとに運営されているが、ここで検討した知的障害をもつ人々とともに暮らし学ぶ活動を行うフォルケホイスコーレの実践から蓄積されたこととして、以下の点があげられる。

第一に、国内外から多様な文化的背景を有する人々が集まり、知的障害を有する人々とともに暮らすこのフォルケホイスコーレでは、日々、コミュニケーションにおいて様々な障壁が経験される。暮らしのなかでこれらの障壁を超える方法、考え方や姿勢を議論し見出し出てゆくことが、「障害のない社会」をめざす「ノーマライゼーション」の具体的実践であることを、人々は体験する。ここで経験したことを、それぞれが日常的に暮らす文化のなかで実現する方途についても、議論・考察する機会がもうけられている。

第二に、このフォルケホイスコーレは、知的障害を有する人々の生活の場を重層化する役割を果たすと同時に、「障害のない社会」をめざすにあたって、多様な知恵を総合する機関連携の具体的な1つの方法を模索・開発してきた。1つの機関では十分になし得ない諸活動に広がる知的障害者の生活について観察し議論を重ねることをとおして、知的障害者のウェルビーイングにかかわるより多彩な活動を可能とするノーマライゼーションの実践への知恵が共有されてきた。それは、すべての人の人生時間を考えるうえで応用可能な知見である。

このように、人生の諸時期に、さまざまな世代の人々とコミュニケーションし考える時間が確保されている場への参加は、多様性に富んだ人々の生を包摂する暮らしの場の構想を、人々が自らの体験をもとに築きあげることを可能とするのである。フォルケホイスコーレは、さまざまな状況の中で人生を生きる人間が暮らす場について継続的に考える場に、すべての人々が参加するために不可欠である道を開いているのである。

## 注

- 1) 1844年に設立された世界に例のない学校。日本の第二次世界大戦前の旧制高等学校と同じ程度のレベルとみられたため国民高等学校と訳されてきた。デンマークでフォルケホイスコーレの運営に携わってきた千葉忠夫はより適切な訳語として「国民大学」「民衆大学」などを提示している（千葉 2009a: 102）。
- 2) デンマークでは1980年代前半以降高齢者福祉の方針が大きく転換した。それまでは大規模な高齢者用施設（特別養護老人ホーム）が主として郊外にもうけられてきたが、その運営費を縮小しかつよりよい福祉をめざして1983年に高齢者福祉審議委員会が発足した。審議会の答申の趣旨であった「老年期を第三の人生」と位置付ける方向で、その後、特別養護老人ホームを作らず高齢者センター（プライアセンター）と呼ばれる高齢者が生活しやすい住宅建設に切り替え在宅を存続させる方向性で福祉を行ってきた。1980年の法改正により、高齢者は約65m<sup>2</sup>の高齢者向けに設計された住宅に住むことになった（千葉 2009a: 148-151）。
- 3) スウェーデンにもデンマークをモデルとした国民大学（フォークホイスコーラ）が、1990年

代半ばにはおよそ130校、2000年代前半には140余校ある。(伊藤 2005: 35; 岡沢・宮本編 1997: 190) ここでも、やはりグルントヴィの精神は引き継がれており、人々は寄宿舎で過ごすこともできるが、仕事を続けながら通うこともできるなどフレキシブルな設定がなされている。現在の仕事のために新しい知識を蓄えるためや、将来の道を考えたり、ときにはドラッグから離れるため、など人々はさまざまな目的をもって集まっている。

- 4) デンマークでは、社会省管轄の公立の福祉施設が日本の保育園にあたり、幼稚園に相当するものはない。保育園は一般に、乳児保育（ヴーグステ 0～3歳）、幼児保育（ボーンホーヴ（子どもの庭）3～6歳）の2種がある。その他に、0～6歳（時によっては10歳まで）を保育する縦割り保育園（インテグレート）もみられる。
- 5) 早期年金とは国民年金（65歳から給付される）より早い時期に受け取ることができる年金のことである。
- 6) 障害者のための特別な法（日本の自立支援法など）はもうけられておらず、社会サービス法で一般と同様に扱われる（千葉 2009a: 166-167）。
- 7) 2006年8月、2007年10月のヒレロッド（Hillerød）における調査では、この問題に深い関心を寄せており経験も有する自治体職員、心理士などがチームを組んで仕事をしている状況について、インタビューを行った。ヒレロッドでは、自治体の事務所に、国際養子縁組みに関するカウンセリングを受けられる場所が設けられている。
- 8) デンマークの幼児教育について研究を続けているオーフス大学のグレウ氏によると、コペンハーゲンの比較的裕福な地域では、私立の幼稚園が増加し、教育内容も、後の高等教育に向けた準備教育がなされるなど、変化がみられるという。こうした動きは、都市のなかで住空間の格差が開くことと連動しているともみられている。

## 文 献

浅野仁・平林孝裕・牧野正憲編

2006 『デンマークの歴史・文化・社会』大阪：創元社。

ボーリッシュ、ステイーヴン（Borish, Stevonn）

2011 『生者の国 デンマークに学ぶ全員参加の社会』難波克彰監修・福井信子監訳、東京：新評論。

千葉忠夫

2009a 『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』京都：PHP 研究所。

2009b 「試験のない学校」（国立民族学博物館 2008年度機関研究プロジェクト成果公開 国際研究フォーラム「ライフデザインと福祉（well-being）の人類学」発表要旨）。

2009c 「試験のない学校が担う社会福祉国家デンマーク」鈴木七美編著『国際研究フォーラム報告書 ライフデザインと福祉（well-being）の人類学——開かれたケア・交流空間の創出』p.88、大阪：国立民族学博物館。

2011 「新年の所感」（出版されていない私信）

Danish Ministry of Education

2006 *Facts and Figures 2005*.

Gulløv, Eva and Fog, Karen (eds.)

2003 *Children's Places: cross-cultural perspectives*. London: Routledge.

伊藤正純

2005 「職業教育を重視するスウェーデンの教育理念」『北ヨーロッパ研究』Vol.2: 33-43。

コック, ハル (Koch, Hal)

2004 『生活形式の民主主義 デンマーク社会の哲学』小池直人訳, 東京: 花伝社。

コル, クリステン (Kold, Christen)

2007 『コルの「子どもの学校論」』清水満編訳, 東京: 新評論。

コースゴー, オーヴェ (Korsgaard, Ove)

1999 『光を求めて—デンマークの成人教育500年の歴史』川崎一彦監訳, 東京: 東海大学出版会。

野村武夫

2010 『「生活大国」デンマークの福祉政策 ウェルビーイングが育つ条件』京都: ミネルヴァ書房。

岡沢憲美・宮本太郎編

1997 『スウェーデンハンドブック』東京: 早稲田大学出版部。

世界教育史研究会編

1976 『北欧教育史』世界教育史大系14, 梅根悟監修, 東京: 講談社。

清水満

1993 『生のための学校 デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』東京: 新評論。

総務庁青少年対策本部

1993 『諸外国における青少年施策等に関する実態調査報告書—スウェーデン・デンマーク, 1993』

Statistics Denmark

2004 *Befolkningens Bevægelser 2003*.

2005 *Data on Denmark 2005*.

鈴木七美

2007 「デンマークの福祉における余暇の思想—フォルケホイスコーレと生活指導教員養成大学の活動をとらえて」『人間学研究』Vol.7: 75-87。

鈴木七美編著

2009 『国際研究フォーラム報告書 ライフデザインと福祉 (well-being) の人類学—開かれたケア・交流空間の創出』150頁, 大阪: 国立民族学博物館。

高田ケラー有子

2005 『平らな国デンマーク』東京: 日本放送出版協会。

タニング, カイ (Thaning, Kaj)

1987 『北方の思想家グルントヴィ』渡部光男訳, 東京: 杉山書店。

ヴォルフェンスベルガー, ヴォルフ (Wolfensberger, Wolf)

1982 『ノーマリゼーション』東京: 学苑社。

湯沢雍彦編著

2001 『少子化をのりこえたデンマーク』東京: 朝日新聞社。